

鶴谷城と佐伯町——今から四十数年前のことども

(一) 鶴谷城の原状想像図について

執筆者 元佐伯中学校教諭 古庄 豊  
元佐伯高等女学校教諭  
紹介者 佐伯史談会員 平川 マサ

(二) 絵の国豊後——佐伯町

執筆者 国府 犀 東  
紹介者 佐伯史談会員 平田 幸市

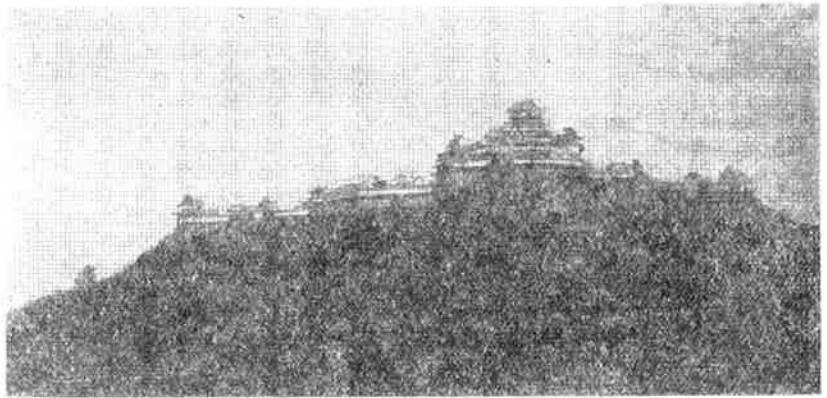
(一) 鶴谷城の原状想像図について

古 庄 豊

この記事と写真とは佐伯新聞社の懇請により昭和十一年一月一日版の同紙上に発表したもので記事を少しばかり訂正しました。

私が鶴谷城に興味をもつようになりましたのは、一つは平素歴史に親しんでいる関係上その懐古癖から来ていふことは申すまでもありませんが、又一つには去る大正十三年 聖上陛下（当時は皇太子殿下）御成婚の記念事

業として佐伯町の在郷軍人会、青年団、消防組等が主催で城山登山道路の開削工事が行われた時、私も第七区消防警備団の一員として之に参加致しました。それからこの山に一種の親しみを覚えるようになったのですが、之



鶴谷城原状想像図

も預っているように思われます。

その頃私は久成寺の前に居りました。大急ぎで大家の根木さんに鍛えて頂いた鍬を携え第七区長さんや消防組の幹部の方々の指揮の下に三の丸の東側今の鳥居の所から橋のたもと大杉の下までの道を開きました。各区それぞれに分担区域がほぼ出来た頃、当時の佐伯町長の小田部さん、在郷軍人分会長の武石先生、青年団長であった佐伯新聞の阿南社長さん方が御巡視になった時、私も手の土を落しながら之等の人々に敬意を表したのを覚えています。この登山の設計者が我校の脇田先生であったということは後になって知ったのでした。

たしかに其の翌日であったと思いますが、当時私の奉職していました佐伯中学では職員生徒揃って本丸二の丸の藪刈や除草等の奉仕を致しました。私は五年生の主任で自ら陣頭に立って城壁をよじ上り大に働いた(？)つもりであります。本校四年生の森脇八千代さんの兄さんは当時五年の級長で本丸の天守台上から鮮やかな統御振りを見せていました。これから城山の登はんも容易となり、私等は殆んど毎日毎夕に登ったものです。時には中学生が授業時間中然も大雨の中を大挙して登り、私共を面くらわしたこともありました。今ではそれも懐しい思い出となりました。

何でも昭和四年の春であったかと思いますが、第一師団管下の千葉鉄道第一連隊長さんから佐伯中学校校長宛に佐伯城の略図を送って貰いたい。実は全国の城郭について陸軍の方で研究しているけれど、我が佐伯城と外に

も一つ一城だけが全然分らないので石垣だけでもよいし大略の構造を知りたいのだから、御多用中恐れ入るが陸軍の城郭研究に御援助下さる意味に於て、お力添え願いたいというような趣旨の手紙が参りました。当時の校長は現富山県立神通中学校長の伊藤仙蔵氏でありましたが、その手紙を私の机の上にそっと置いてありました。それからの幾日間は毎日放課後になると城山に登り、大体の見取図を作り一歩々々、歩測を行いとも角も礎石だけの図面が出来上りました。それで之を清書しそのまゝ發送するつもりでいしましたが、心の底に何か充たされぬものがあったと見えました。ヒョットしたら毛利家にもっと精細な絵画はあるまいかと思つて、謠い仲間でもあり近所でもありません小寺武太郎さんに事情をお話しすると、毛利家にあるにはあるとのお話故、その門外不出の大切な絵図を拝借願いました。実はあまり期待してはいなかつたのです。所が意外にもそれが元文三年今から二百余年前にその道の専門家の描いた、実に立派なもので本丸、二の丸、西の丸、北出丸より三の丸、大手門に至るまで石垣城壁重要建物は申すまでもなく、武者走犬走りより東西の外曲輪そとまわに至るまで精細に描かれた得難き逸品です。

何とも言いようのない心の躍動をジツト抑えながら一氣呵成かきいに模写して、鉄道第一連隊長宛送りました。現在陸軍で使っている城郭史等にはこの私の模写したものが載っているわけです。佐伯の方々は鶴谷城が昔から天下に知られていたと思われたら大間違いです。此の名城も漸く昭和四年に至つて始めて天下に知られた程によく城の秘密が保たれていたのであります。

之で私は私のお粗末な見取図を送らずにすんだことが私の学問的良心とでも申しますか、満足せしめたばかりでなく立派な佐伯城絵図を天下に紹介することが出来て、佐伯の方々にいくらか申し訳が立ったと喜んでいきます。此の絵図は当時の佐中生数名のものに模写を願ひ、今中学校に保管してある筈であります、本校でも是非生徒の有志に描いて貰つておきたいと思つています。

昭和七年の暑中休暇に私は例によつて佐伯町の旧家を訪ねて古記録を漁つて歩きました。私の願う所は最も完備していたそのかみの佐伯城を佐伯の方々に知らせたいのです。城跡には天守台（今の毛利神社、神殿、拜殿の所）があるから必ず天守閣がなければならぬ。折角描くなら天守閣の聳え立った原状想像図を描いて見たいと

苦心しておりますと、中学校の飯沼先生から吉田鶴多さんの家が毛利家代々の御用職であったことを承りましたので、早速新町の吉田家を訪ねて一年の吉田フサさんのお祖母さんにお会いして佐伯城の設計図を見せて頂きました。吉田家保存の設計図は実に精緻な見事なものです。五層の天守閣がありますけれどいわゆる小屋組ばかりで壁もなく瓦も置いてないもの、然も何年頃まであって何時無くなったのか記録の徴すべきものがありませんので、天守閣の備った絵図を描くことは断念することになりました。

そして毛利家にある元文三年の絵図と吉田家の設計図を参考して、原状想像図に着手したのですが第一困ったことは櫓や塀の高さ間口奥行等の寸法がサッパリ分かりません。寸法が分らないと各部の比例が面白くまいりません。而し正確さは欠いでも大体の想像図だからと勇気を出して愈々着手致しました。

時は昭和七年の秋、写生の場所は下鉄砲町の現在の私の住居、二階の裏側の窓を取り払って落葉木のポツポツ色づき初めた城山を写生して其の上に石垣を描きました。昔の絵図は正面も側面も背面も皆正面から見たように描

いてあります八方正面図です。之を下鉄砲町より見た城山の上に東向きの正面図として載せて見ました。之れで立派な原状想像図が出来たはずなのですが、残念なことには私は絵を描くことが下手ですからチットも立派ではありません。そこで五年生の一番絵の上手なK君を頼わして水彩画で描いて貰い、昭和九年三月一日の卒業式に来賓室にかかげました。其の年即ち昭和九年の秋の展覧会に私は郷土史料を陳列した一室を設けてみたいと思って、郡内の旧家に古文書の拝借方をお願いした所、まことに得難い記録が多数集りました。其の中で芳島の秋山先生の御好意によりてお借りすることの出来ました戸倉家（佐伯藩城代家老）に伝わった古文書中に享保十五年の年号のある記録がありました。

その中に城の各部にわたって詳細にその寸法を記したものがありませんから、私はK君に描いて貰った原状想像図に訂正を加え、始めて確信ある図を得ましたので其の描写方を菅一郎先生にお願いしました所、わざわざ水彩画用紙や絵具を御取寄になって昭和九年の秋に見事な鶴谷城をお描き下さいました。それを写したのがすなわちこの写真であります。

昔から城を作った者は城の秘密を保つため、大抵其の藩内に養ひ殺されるかさもなければ打首位は覚悟しなければならなかつたのです。藩祖毛利高政公の命によつて鶴谷城を築いた棟梁は伊予の人でしたが帰国を許されません。せめて死骸だけでも故国の見える所に埋めて貰いたいと申し出たとかで、今其の人の墓は佐伯駅の上の方の山にあるように聞いていますが、旧藩時代に秘中の秘として保存せられた絵図や記録をあばいて城を作り上げ、それを他国どころか天下に公表した私はどうしても打首どころでしょう。菅先生に描いて頂いた佐伯城の写真は中学校の飯沼先生が東京の毛利家に送りました所、殿様には大層お喜びになつたと毛利家執事よりお礼状がまゐっていました。

私は打首どころか昨年五月修学旅行で東京へまゐりました時、華族会館より帝国議会議事堂へまゐります途中毛利子爵閣下より「其の後城山の研究は如何ですか。大層あの記事は面白く拝見しました。今後引続き御研究願いたい」とおほめのことばを頂きました。

## 補遺

### 古庄 豊氏について

直入郡荻町出身、大正十二年七月より昭和十一年三月まで佐伯中学校教諭、昭和十一年四月より昭和十八年三月まで佐伯高等女学校に勤務、歴史、国漢の教師。

本文は佐伯高等女学校校友会誌「花すみれ」第十一号（昭和十三年刊）に掲載されたもの。

註 (1)資料(一)(二)ともに現代かなづかいに改め、若干の語句にはルビをつけた。

(2)一二疑わしいところもあるが、原文のままにした。

(3)国府犀東氏については、参考資料がないのでよくわからない。ご存じの方はお知らせいただきたい。

(4)奇しくも、期せずして四十数年前の佐伯に関する二篇が寄せられた。興味深い資料である。